

Contents

■学部長メッセージ……………	2
■特集 ものづくり教育	
未来工房長のメッセージ……………	4
学科のものづくり教育……………	6～8
■2011年度卒業生の就職結果について…	9
■連載／卒業生インタビュー……………	10
株式会社 三田精工 代表取締役 三好康夫さん	
■学科ニュース……………	12～15
■キャンパスニュース……………	16
■平成23年度学位取得者一覧……………	17
■「生産工学部創設60周年記念事業募金」	
寄付者ご芳名……………	18
■新任教員紹介……………	20
■創設60周年記念行事……………	22
■平成24年度行事(後期)……………	23



表紙：生産工学部60周年記念棟39号館
(平成24年3月竣工)

生産工学部におけるものづくり教育

昨年の3月11日午後2時46分、東日本を襲った地震と津波。それに追い打ちをかけた原発事故の「巨大複合災害」による被災。現在、復興に力を尽くされている学生・ご家族、そして卒業生の校友の皆様にご心より敬意を表するとともに、一日も早い復興を衷心より祈念いたしております。



日本大学生産工学部
学部長
松井 勇

「巨大複合災害」に発展した自然災害とともに、長引く経済不況をはじめとする社会問題や課題を思う時、この厳しい社会情勢に歯止めをかけ、好転させるのに必要な「人間の叡智と実行力」が今、問われていると言わざるを得ません。

このような社会・経済状況の中で、我が国の産業の生き残りと言後の大いなる発展は、新しい技術を創造することにほかならないと強く思います。

近年、我が国は「科学・工学技術創造立国」として国際的にも自他共に認められてきました。

最近、マスコミに取り上げられ話題になったボーイング787は、機体の70%近くを海外メーカーを含めた約70社に開発させる国際共同事業であり、イタリア、イギリス、フランス、カナダ、オーストラリア、韓国、中国といった国々とともに、日本からは数十社が参加し、日本企業の担当比率は35%

にのぼり、過去最大となりました。主な内容は「三菱重工業」が主翼、「川崎重工業」が前方胴体、主翼固定後縁、主脚格納庫、「富士重工業」が中央翼、主脚格納庫の組み立てと中央翼との結合、「東レ」が炭素繊維複合材料を担当しました。

このような大手企業のみならず、「科学・工学技術創造立国」の中核に位置するのが中小企業であり、その中小企業が「実質的に日本の産業界を支えている」とともに、「世界で認められた科学・工学技術を保持している」と言っても過言ではありません。

そのいくつかの例を挙げますと、
「痛くない注射針」：従来の注射針のようにパイプを細くするのではなく板金を巻いて造る新製法により、ステンレス板で長さが20mm、穴の直径が90μm、外径が200μmと、いわば蚊の針と同じ細さの注射針を開発し、グッドデザイン大賞を受賞した製品であり、世界シェア100%であります。

「世界最大のアクリルパネル」：ガラスより軟らかく、安全で強度も高いアクリル素材を使い、高さ8.2m、幅22.5m、厚さ60cmのアクリルパネルが沖縄美ら海水族館の巨大水槽「黒潮の海」の窓に設置され、ギネスブックに認定されました。パネルを積層して厚みを出す接着技術、接着剤の硬化時に強度を増す熱処理技術、1枚20tのパネルを7枚接着し水槽の躯体に接合する施工技術等を開発し、7,500tの水圧に耐える巨大な窓を完成し、世界40ヵ国以上での実績があります。

「ISO・JISによる高精度硬さ基準片」：特注の平板鋼を円形に成形し、熱処理を施し試験片面のどの点を測定しても同じ硬さ(値)が出るように均一に処理した基準片を製造し、各種工業的硬さ試験のために世界中で愛用されている製品です。

その他にも我が国が世界に誇れる「科学・工学技術」は枚挙にいとまがないと言えます。

今、生産工学部は創設60周年を機に、創設当時の原点を見直し、生産工学部の特徴である「ものづくり教育」を強く・大きく標榜いたしております。

他の大学や学部と異なり、生産工学部は産業界に最も近い位置に存在しています。前述した世界に誇れる我が国の「科学・工学技術」に「ものづくり」の精神と技術を学ぶことはもちろん、学生たちのさらに工夫する力を引き出す教育を行う環境づくりが必要と考えています。それに応えて、日本大学および生産工学部の原点に立脚し、教員の教育力と研究力のさらなる研鑽を基盤に「ものづくり」の社会的 중요性ととともに「ものづくり」の楽しさを学び、練れる設備と道具と空間を整備しています。既設9学科では各学科継続的に独自の「ものづくり教育」を行っています。それに加えて、今年3月に竣工した生産工学部60周年記念棟(39号館)の1階にある「MIRAI Studio(未来工房)」は9学科の学生共通の空間として、サークル・クラブ等の「ものづくり」のアトリエとして機能し、近未来に世界に誇れる「科学・工学技術」のベースキャンプになるように期待しているところです。同時に、「学生の目線に立った大学教育と環境づくり」とともに、「ものづくり教育」により「社会・企業が目線に立った人材づくり」を行い、社会・企業に役立つ新しい技術を創造する力を身に付けて欲しいと願っております。

以上、学生達はもちろん、社会にとって魅力ある生産工学部を創出するために努力いたしておりますので、さらなるご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



ものづくり拠点「未来工房」完成



1F 未来工房



39 号館外観



1F ギャラリー



6F プレゼンテーション設備を備えたスプリングホール



6F 多目的ラウンジ



2F カフェ

39号館
生産工学部60周年記念棟

生産工学部 60 周年記念棟 39 号館開館に寄せて

ものづくりを体験し、その面白さをおぼえてほしい

.....未来工房長・加藤数良教授（機械工学科）

歴代の学部長が述べてこられたように、日本大学生産工学部は「理論」と「実業界」のあいだの、どちらかといえば実業界に近いところに位置しています。その基本は「ものづくり」にほかなりません。

ところが、最近は何ものをつくった経験がない、プラモデルですらつくったことがないという学生が多いように感じます。私自身は生産工学部の1期生ですが、当時は学生の半数以上は入学前に何かしらものをつくった経験を持っていた。まだ近隣に町工場が多くありましたから、機械が見たければすぐ見られました。たとえば遊び道具の1つ、コマなども中心を出せばよく回りますから、頼み込んで近所の工場で加工してもらうこともできました。それをそばで眺めていたりするわけですから、旋盤がどのようなものか知っている学生も多く、場合によっては使ったことがあるという学生さえいました。

今、多くの学生が、寸法を測る道具といわれて思い浮かべるのはモノサシや巻き尺ぐらいです。高度なものづくりに必要とされるノギスやマイクロメーターなどという計測機器については、せいぜい「話には聞いているが……」という程度です。町工場が郊外へ移転する。お父さんがサラリーマン化する。そしてマンション住まい。これでは日曜大工もままなりません。下手すると、ノコすらひいたことがないから、ノコギリの歯がどういう構造になっているのかも知らない学生が多くなりました。

本学でも、ものをつくるという意味で実際に金属を加工するのは、おそらく機械工学科だけでしょう。しかし、その機械工学科の学生にしても、ものをつくるのは1年生の実習だけ。2年生では何もしません。3年生になればものづくりの実習がありますが、もし、その実習を選択せずに4年生でコンピューターの研究室に入ってしまうと、1年の実習以外、ものづくりを何もやらないで卒業してしまうことになります。

電気電子工学科では基板のハンダ付けなど。土木工学科ではコンクリートを練ってのテストピースづくり。建築工学科では建物のモデルづくりなどをやるでしょう。各学科でのものづくりはそのレベルだと思いますし、マネジメント工学科や応用分子化学科、数理工学学科で

はものづくりに取り組む機会にはさらに少ないと思います。

この工房はそうした全学科の学生に利用していただくことを前提につくられました。まず道具や機械の名前を覚え、どういうシチュエーションで使うのかを覚える。その道具や機械を使いながらものづくりの面白さ、楽しさを覚える。そうすることで生産工学部、つまり「工学部」へ来たことの意味が明確に自覚でき、より興味をもって学んでいくことができるのではないかと思います。

機械工学科には実習工場があり、実際の工場で使っているような本格的な機械が入っています。今回、工房に設置した機械類は、それら本格的な機械と手作業の中間か、もう少し手作業寄りの機械というイメージです。分かりやすく言うと、ちょっとしたマニアが持つような機械。加工のプロから見ればオモチャ的機械で、いわば日曜大工レベルの機械かもしれません。しかし、できることは同じ。パワーが小さいので、大きなものが作れないというだけのことです。

金属加工、木工、陶芸、電子基板づくり等々……。そのほか要求に応じて溶接、あるいはパソコンのCADで立体図をつくる。そういったことがそれなりにできる初歩的な機械を設置しました。その一方で、金属加工では3次元曲線加工などある意味で最高のことができる機械も導入しました。将来、実業界に入ることと思うと、こういうハイレベルな機械を目

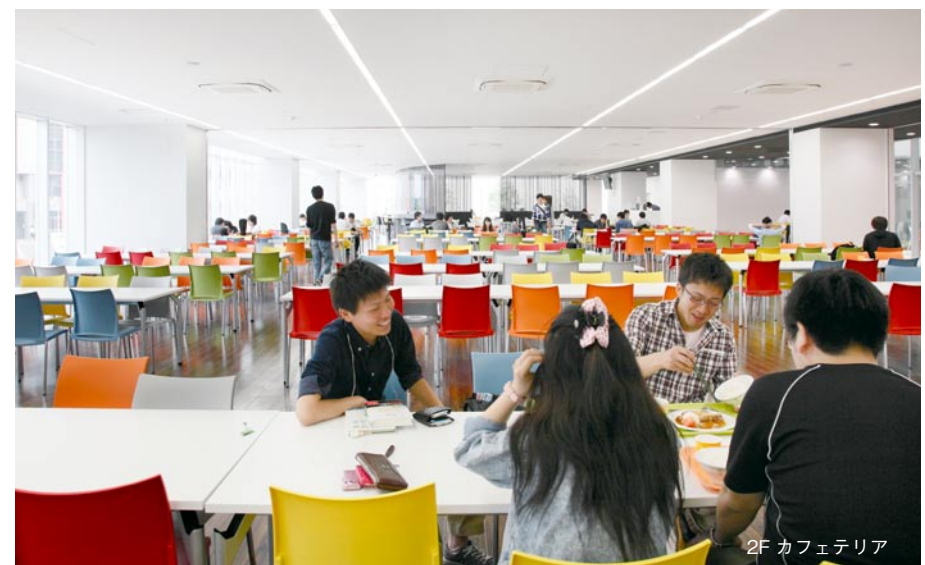
にして存在を知っておくだけでも大に意味あることだと思います。

もちろん本学の学生であれば誰でもこの工房を使えますが、事前に30分から1時間の「安全に対する認識」の最低レベルの講習を受けていただきます。この講習を受けた学生が中に入れることになります。学部長は、学生のみならず、教職員から場合によっては地域の方にもこの工房を開放しようと考えておられます。その受付システムなどを目下検討中ですので、近い将来、地域の方々にまでご利用いただける日が来るのでは、と思います。

ぜひ、この未来工房を通して、本学の基本である「ものづくり」の面白さ、そして難しさを知っていただきたいと思います。



屋上のソーラーパネル、2Fで発電状況がモニターできる



2F カフェテリア

機械工学科におけるものづくり教育への取り組み

実践力重視のものづくりと乗り物大好き学科

機械工学科のキャッチコピーは、「実践力重視のものづくりと乗り物大好き学科」です。ものづくりのセンスと実践力を養い、産業の基盤を支える機械や乗り物を創造できる人材を社会に供給するべく、低学年から、ものづくりの達成目標と期間などを明確にした PBL（Project-Based Learning）教育を取り入れています。

1 年次の「フレッシュマンデザイン」では、新入生に対する機械工学への導入授業として複数の教員の研究紹介を聴講するだけでなく、少人数のグループに分かれて機械に関連する「もの」の設計製作競技会を実施しています。平成 22 年度はペーパーブリッジ、平成 23 年度は紙飛行機を題材として実施しました。

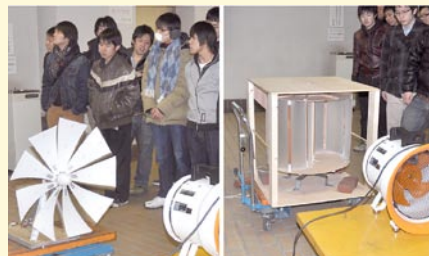
3 年次の「プロジェクト演習」では、年度初めに公表される題材およびレギュレーションに沿って、5 人程度が 1 グループとなって学生主体で 1 年をかけて設計製作を行います。何もない状態から自分たちで 1 つ 1 つアイデアを出し合い協力し合っ て機械を創り上げていくことで、機械の設計および製作に関する知識が向上するのはもちろんのこと、学生間、教員、技術員とのやり取りを通して、コミュニケーション能力の向上にもつながっています。年度末の競技会は、4 年生や大学院生も見学に集まり大きなイベントの 1 つとなっています。

また、2 年前からは、学部からの支援のもと、米国でのパイロット免許取得プログラムを開始し、これまでに学生 8 名がパイロット免許を取得しました。

このように、機械工学科では、PBL 教育および資格取得支援を推進して、社会における実践力を在学中に養成することを目指しています。



フレッシュマンデザイン「紙飛行機競技会」・「表彰式」



応用プロジェクト演習「水平軸型風力発電機」 応用プロジェクト演習「垂直軸型風力発電機」



自動車プロジェクト演習「電力カート」

電気電子工学科におけるものづくり教育のご紹介

電気電子工学科ではものづくり教育を積極的に行っておりますが、今回は電気電子工学実験Ⅴで行っている変圧器の実験と電気電子設計（S）について紹介いたします。

変圧器は電磁誘導現象を利用して交流電圧を高くしたり、低くしたりする機器です。発電所からユーザまで電力を効率よく輸送するためには欠くことのできないものです。

電気電子工学実験Ⅴでは3週にわたって変圧器の実験を行います。第1週は原理を学び、設計を行って巻線を巻き、変圧器を製作します。第2週は変圧器に実際に大きな電力を加えずに特性を調べるための無負荷試験と短絡試験を行い、その結果を用いて算定を行って、実際に電力を加えたときの変圧器の電圧変動や効率などの特性を推定します。第3週は変圧器に実際に負荷をつないで電力をかけ、電圧変動や効率などの特性を測定します。その後、第2週に行った推定の結果と照合しながら総合的に考察します。以上の3週間の実験を通して実際の機器のものづくりを体験し、授業で勉強した原理と実際のものとの関係を理解し、将来の電気技術者としての素養を養います。

一方、電気電子設計（S）はエンジニアリングデザイン対応科目の中心に位置づけられる科目です。この電気電子設計（S）は、単に電気・電子の回路を設計するだけではありません。設計プロセスの中に部品の選定から、経済性への考察、環境や利用者への配慮といった要素を含めた上での設計について学んでいきます。学生が自ら必要な部品を選定するのはやさしくありません。部品の規格は決まっており、設計通りの数値の部品が手に入るとは限りません。従って部品の規格を知った上で設計を修正する必要があります。座学で得た知識を総合的に活用して問題を設定し、解決する能力を育てる科目です。



建築工学科のものづくり教育の現状について ーアクティブラーニングー

全国の大学を対象に「4年間を通じた大学のアクティブラーニング調査」が実施（河合塾 教育研究部）されました。

日本大学では、生産工学部建築工学科が実践している「課題解決を目的としたアクティブラーニング（PBL、創生授業等）」「知識の定着を目的としたアクティブラーニング（演習・実験等）」の取り組み（PBL、実験、演習、フィールドワークなどの参加型能動型学習）が評価され、ヒアリングを受けました。

近年、大学では「学生が何をできるようになったのか」を基準とした教育の質が問われるようになってきました。「学習者中心の教育」の実践が求められ、この鍵を握るのが「アクティブラーニング」という授業形態になります。

アクティブラーニングとは「能動的な学習」のことで、授業者が一方的に知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究や PBL（Project/Problem Based Learning）、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り込んだ授業を意味しています。

建築工学科では、「建築にとどまらない幅広い分野」を学びます。細分化された領域を横断的・総合的にまとめ上げていくオーガナイザーとしての役割が求められます。そのために、新しい価値と



創造を生み出す発想力・応用力・対話力を養成し、問題解決能力を備えた人材を育成していくことを教育の最大目標に掲げています。

この教育目標実現に向けて独自の PBL（Project/Problem Based Learning）として、自分の頭で考え、手、足など「からだ」を使った学習を実践しています。関連科目の知識を総合する Project が各授業（講義・建築実験・建築設計演習）を横断して組み込まれ、建築への導入（ユニットによる少人数教育）から、「問題解決」「知識の定着」が各科目の連携により図られ、学生の総合力を高めています。

応用分子化学科のものづくり教育の現状について

携帯電話や自動車、医薬品に生活用品など、私たちの身の回りにある製品のほとんどは化学材料でつくられています。これらの材料は、地球に存在する約 100 種類の元素の組み合わせによってつくられています。応用分子化学科では、このわずか 100 種類の元素を組み合わせ、さまざまな機能を持った物質をつくり、私たちの生活に役立てる“ものづくり”の技について、学び、考えています。特に、当学科では環境に配慮したグリーンケミストリーの考え方を意識した“ものづくり”を目指しています。

初年次に設置されている「ケミスト入門」では、私たちの身の回りにある化学製品の特徴、製造方法や製造原理など、“ものづくり”と学問のかかわりについて学びます。また、基礎的な科学系科目や専門科目などの履修を通じて興味喚起された内容、学生自身の将来などが勘案された希望に基づきコース分けが行われます。本学科では、「物質デザインコース」、「生命化学コース」、「国際化学技術者コース」の3コースが設置されています。

3 年次には、必修科目である「生産実習Ⅰ」で、企業や学外の研究機関での実習が行われます。生産実習Ⅰを含む生産工学系の科目やゼミナールⅠ・Ⅱを通じて、学問と学生自身の将来の進路の関わりについて学び、考えてもらいます。4 年次には、必修科目である「卒業研究」で、これまでに学んだ知識、修得した技術や考え方のすべてを組み合わせた“ものづくり”を実体験し、その醍醐味にふれてもらいます。

授業、演習、実習を通じて、“化学”が私たちの生活を変えることができる力を持つことを肌で学びとともに、この力を将来の人類や地球環境のために役立ててほしいと教員一同が願っています。



学生実験（液晶作製）の様子

数理情報工学科におけるソフトウェア開発教育

数理情報工学科におけるものづくりとは、ソフトウェア開発をすることです。例えば、車の騒音や流体等の複雑な現象をコンピューター上で再現するためのソフトウェアであったり、大規模集積回路の故障を診断するためのソフトウェア等、研究室ごとに異なる種類のソフトウェアを、数理情報工学演習という3年次通年で実施する演習で学びます。

本演習の特徴は、3～4人のチームを組んでソフトウェアの設計、開発、テストと評価を行うことで、これは企業に入ってから行うのと同じ開発工程を、半年から1年かけて実践的に学ぶことが特長です。

研究室の中には、世の中がどのようなソフトウェアを必要としているか、マーケティングの段階から実施するところもあります。特に、古市研究室では世の中の役に立つシリアスゲームを開発することを目的として、3年生のうちに各チームで一本以上のゲームを開発する他、その成果は展示会へ出展するのはもちろんのこと、テレビやラジオ等でも紹介されたり、3年生の後期終了後には学会発表を必ず行うことを特徴としています。これはすなわち、企業におけるソフトウェア開発の全行程の主要な部分を実践していることであり、そのことが、卒業後の学生達の進路決定に大きく役立っています。



創生デザイン科のものづくり・場づくり

デザインは人間と社会と自然を結ぶ役割を持っています。今日では産業生産活動を踏まえつつ、「人間」と「もの・社会（環境）」をつなぐ造形活動全体を指し、その分野はたえず変化し拡大しています。

創生デザイン学科では、アートとテクノロジーの融合を指針におき、理系、文系の境界を超えてデザイン志向の方々を迎え入れ、やわらかい工学を身につけた「デザイナー」、「コンセプター」の育成を目指しています。

演習、実習科目を1年次より組み込み、「デザインのプロセス（選択－認識－表現）」を体得的に経験できる授業内容にして、理論と実践の相互関係を高める実学教育を目指しています。授業では、デザイン活動の基礎や基本となる知識と概念、観察と表現、発見と創造の訓練となるものを学んでいきます。

プロダクトデザインコース

人間と社会、人間と自然を結びつける媒介となるデザインとして「もの」と「人（使い手側）」との相互の関係を考える。

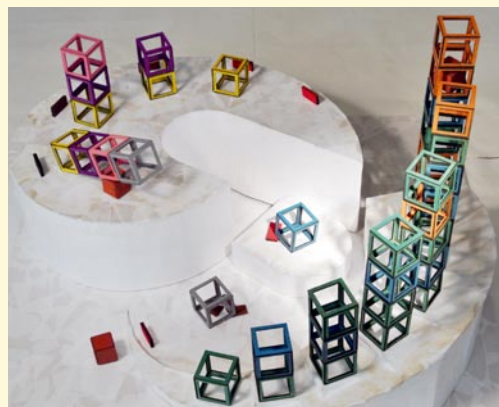
見る・考える・聞く・書く機能の延長。また、手・足の延長など、身体的諸機能の拡張としての道具、ものづくりを考える。



スペースデザインコース

人、空間、行為（活動）の対応性や融合性を考えながら、いかに快適で安全な場所とするか種々の空間の創造を行います（場づくり）。

- 生活空間にかかわる対象（家具、照明、インテリアなど）
- 社会空間にかかわる空間（街、道路、公園、移動空間、自然と親しむ空間など）
- 環境造形、サインデザインなどのビジュアルデザイン



2011年度卒業生の就職結果について

＜2011年度の就職をめぐる状況＞

「超就職氷河期」、この言葉は2010年の流行語大賞にノミネートされた造語です。今を遡ること約10年、1999年の新規卒卒者の求人倍率（求人数 / 就職希望者数）は、リクルート調査によると0.99倍と1.0倍を割り込み、就職希望者に求人数が達しなかった状態を「就職氷河期」と呼びましたが、2010年はさらに厳しい状況を迎えたことから、新たな造語が誕生したわけです。

求人倍率も2008年2.14倍⇒2009年1.62倍⇒2010年1.28倍、更に2011年は1.23倍と、年々低下し続けています。同時に厚生労働省調査によれば就職活動が終了する10月時点の内定率も、2009年62.5%⇒2010年は57.6%、そして2011年は若干持ち直したものの59.9%と過去2番目の低さとなり、先に触れた「就職氷河期」の最低ラインの60%を下回っています。ただし、2012年1月時点での生産工学部全体の求人総数は2,484社で、就職希望者は1,176名ですから、求人倍率は2.11と前述のリクルート調査の1.23倍より高く、相対的には良好な状態にあったと考えられます。

このように全国の求人倍率が1.23倍であるにもかかわらず、なぜ内定率が低いのか、そのギャップは「企業規模（大きさ）別によってその倍率が異なる」こと、すなわち1,000人以上の規模では倍率が0.65倍（5,000人以上は0.49倍）であるのに対して、1,000人以下では1.86倍（さらに300人未満の中小企業は3.35倍と高い）となっています。それとは逆に就職希望者の選択は有名大企業に集中し、更に前年の2010年3月卒業者のうち約8万人が未就職者であり、この人たちが2011年の就職戦線に加わっていることが大きなギャップを生み、「超就職氷河期」を招いている原因です。

＜学部・学科の就職率＞

そうした中で生産工学部もかなり厳しい状況にありましたが、2012年3月末の就職率は学部全体で90.7%（うち女子は87.2%）、大学院は96.98%と健闘しています。これを学科別にみますと「機械工学科93.9%」、「電気・電子工学科90.0%」、「土木工学科99.3%」、「建築工学科94.1%」、「応用分子科学科78.2%」、「マネジメント工学科78.8%」、「数理情報工学科97.1%」となっており、学科により就職率のバラツキもありますが、それぞれの専門的な知識や技術が生かせる業種・業態の景気によって企業の求人状況が変化するため、と考えられます。

次に産業別の就職状況についてみると、学部全体では建設業22.6%、製造業15.8%、サービス業13.4%、卸・小売業9.7%、情報通信業7.6%となっていますが、学科別ではその専門分野の業界に集中し、機械は製造業、電気は建設業と製造業、土木と建築は建設業、応用分子は製造業、マネジメントは卸小売とサービス、数理情報は情報通信業に就職しています。また大学院の修了者は製造業32.9%、建設業20.6%、サービス業13.5%、情報通信業12.4%となっています。

＜就職企業の選択とキャリアの展望＞

厚生労働省によれば、大学卒業後の3年間で35%の人が離職していきませんが、自らが希望した企業に就職でき、同時に適合した仕事に就いた場合には、離職しないという、同省の研究結果があります。生産工学部では、将来のキャリアが展望でき、的確なキャリア選択（就職）が可能のように2年生からキャリアデザインやインターンシップなどのキャリア形成科目を設置していますが、そうした学習がキャリア形成に効果があるかの検証を実施しています。2011年の就職決定者(518名)のアンケート結果では、生産実習（インターンシップ）が最も就職活動に役立ったこと、また、86.4%の人がほぼ希望通りの企業に就職できたと回答しており、就職率のみならず的確なキャリアの選択が可能であることも重要なことです。



教室は1つ。専任教師不在。会頭肝入りの「社長教育(工業経営学科)」は手探り状態で始まった。

生産工学部は、学生が中心のキャンパスを目指し、教職員はもちろんのこと多くの方たちがさまざまなかたちで学生をバックアップしています。なかでも一段と心強いサポートをしてくださる卒業生の方を紹介するのがこのコーナーです。

昭和27年(1952年)に生産工学部の前身である工業経営学科が新設され、今年60周年を迎えました。その記念すべき年に、第1期生であり日本大学理事も務められた大先輩、三好康夫さんにご登場いただきました。

■農学部から転入し、工学部工業経営学科(生産工学部の前身)の第1期生に

日本大学に入学したのは昭和26年。私が20歳のときですが、実は最初農学部(翌27年に農獣医学部に改称)でした。

北海道・倶知安の出身ですが、大学に入る前の何年かは、親父が農協の組合長だったので、地元の定時制高校(夜間)へ通いながら農協のみそ・しょう油工場を手伝っていました。ボイラーの資格を取って醸造所の仕事をやっていたわけです。ボイラーのほかにも通信教育で電気関連の資格なんかを取ったりしてましたから、いわゆるものづくりに関連するようなことが、そのころから好きだったんでしょうね。

そんなことをしながらも、偉くなる人というのはみんな大学を出ている、それなら自分も大学へ行こうと思い立ち、大学検定試験を受け、そして日本大学に入りました。

農学部を選んだのは、実家も農業関連でしたし、いずれは北海道に戻って農協の幹部にでもなれば、と思っていたんでしょうね、きっと(笑)。

ところが、大学に入った翌27年、工学部(現・理工学部)に工業経営学科(生産工学部の前身)という新しい学科ができることになり、転入者の募集がありました。そこは会頭の肝入りで社長学を教育する学科だから、これは将来有望だということで、それじゃそこへ行こうということになりました。工学部は、当時の日本大学の花形学部でもありましたね。もちろん、希望者のなかである程度以上の成績の者を対象に選抜試験があり、幸い私も含めて120名が受かりました。



【PROFILE】

三好 康夫(みよし やすお)
昭和6年生まれ。北海道出身。昭和26年日本大学農学部(農業獣医学科)入学。翌27年に工学部(現・理工学部)に新設された工業経営学科に転入。昭和30年同学科卒業。以降、電車の車両修理会社、自動車部品製造会社、商事会社などに籍置き、技術者として電車の自動ドア開閉システムや自動車用アンテナなどの開発に携わる。昭和48年には経営診断士の認定を受け、昭和50年にアルミダイカストの二次加工を主力事業とする株式会社三田精工を設立。代表取締役として現在に至る。その間、昭和56年から3年間、日本大学理事を務める。趣味はゴルフ。オフィシャルハンデは9の腕前。

■教養としての土木・建築・機械・電気・化学、専門として労務管理…これが社長学

学生生活は、前述したボイラーの免許のおかげで割と楽でした。資格を持っていると結構な収入があって、学費にも不自由しませんでした。

秩父セメントという会社で、年に1回ボイラーの検査がありました。実習を兼ねて日大からも20人ほど手伝いに行きました。当時は「カンカンムシ」と言っていたんですが、カンカンとたたきながら、中に厚く焼き付いたスケールを取ってきれいに掃除をするんです。みんな1日350円をもらうんですが、私はボイラーの免許を持っているからということで1日450円でした(笑)。

出来たばかりの工業経営学科は教室が1つ。ほかには何もない。先生だってあちこちから講師で来ました。そうやって始まり、2年、3年たってやっと専任の先生が決まる、という状況でしたね。

そんな中で、まず教養として土木、建築、機械、電気、化学の概要を勉強する。さらに自分の専門を、例えば労務管理なら労務管理をやった。専門だけでなく、いろいろ学べたことが非常に良かったと思います。今は、それぞれが学科になっていて、いきなり小さい殻に入っちゃいますから、最初からサラリーマンを養成しているような感じですね。

もちろん、各分野のスペシャリストは必要ですが、社長学では最初からゼネラリストを目指していたということでしょう。実際、当時、工業経営学科に来た学生の半分以上は親とか親の兄弟が会社経営者でした。だから、会頭は全員を社長にしようと思われたんですが、やっぱりそ

うはいかんですよ(笑)。でも、教育そのものは厳しくてね。適当にやっていた人はみんな落とされて、すんなり卒業したのは、120名中わずか33名。名簿を見ると、卒業が1年後、2年後という仲間がたくさんいますよ。

■法律制定の基礎データとして今も残る卒業研究の成果

卒論は「労働中における女子従業員の疲労度について」というものでしたが、この調査研究は忘れられない思い出です。

埼玉県の上尾に、女子従業員が600人ぐらいいるレース工場がありました。労働省の技官でもある担当助教授と1か月間そこに泊まり込んで、データを取りました。ちょうど生理に当たる女子従業員30人を選んでもらい、午前と午後と2交代制でしたが、それぞれ仕事を始める前、中間、そして終わったときの3回、フリッカーという機械で視力を測ります。人間の疲れというのは目に出るんですね。それを繰り返して1か月。取ったデータをグラフにしてみると、生理前に疲れが出て生理日になると普通になる人、前も後も何でもない人、終わってから一気に疲れが出る人といろいろです。その結果をまとめて労働省に提出しました。

そのデータを基に、女子従業員が「生理で休みたい」と申し出たら休ませなくちゃいけないという法律がつくられまし

た。昭和31年ごろの研究ですが、今でもそれが基礎データとして使われています。大きな国の仕事の中の一隅に、我々の研究成果が入っていると思えば、気持ちいいですね。法律が変わらない限り、そのデータは生き続けると思いますね。

■何か1つチャレンジ

学生時代に何か1つ身につけておいたほうがいい。建築だったら建築、土木だったら土木、電気だったら電気関連でいろんな国の資格がありますね。そういうものにチャレンジするのも無駄じゃないと思います。国家資格をどれか1つ取ろうとすれば学校で学ぶのとはまた違って、それを取るためにものすごく神経を使います。首尾良く合格して資格を持っていれば、社会へ出るとき、就職するときにも有利になります。

私自身も、ボイラーの免許にずいぶん



助けられました。本人が努力しないと国家資格は取れないから、挑戦すること自体、価値あることだと、私は思います。

【編集後記】

骨量が豊かな体格と、背筋がびんと伸びた姿勢から柔道でも?と伺ったら「量の上ではなく、土俵の上」。本学でも相撲部で活躍されたそう。座右の銘は忍耐。「実際は忍耐するまでもなく早々に問題が解決してしまう」ことが多いそうだ。それゆえか「取りまとめ役はお前が」と言われ続けてきた。ご本人は「若いときから爺顔をしていたせい」とおっしゃるが、理事にまで推薦されたように、ひとえに人望の厚さゆえでしょう。

株式会社三田精工代表取締役 三好康夫氏
(生産工学部第1期生、元日本大学理事)

機械工学科

海外研修への参加

山中七皇海君（日本大学藤沢高等学校出身）は、自動車技術会学生自動車研究会（以下学自研）の学生委員として、講習会・見学会の企画立案や実施を精力的に行っています。昨年度末には、学自研活動の一環としてタイを訪問し、現地の大学や自動車関連企業を見学しました。また、日本同様にタイでも実施されている学生フォーミュラ大会も見学して、現地の学生と意見交換を行いました。

その際、山中君は日本における学自



キングモンクット大学フォーミュラチーム訪問

機械工学科における国際交流

研の活動内容に関して英語で発表を行い、質疑応答では多くの熱心な質問を受けたそうです。

この経験を通して、山中君は改めて語学力の重要性を痛感するとともにタイ人学生の研究熱心な姿勢に刺激を受けたそうで、帰国後は以前にも増して研究活動に邁進しています。

海外研修（インターンシップ研修生）の受け入れ

邊吾一教授は8年前からインターンシップ研修生としてのフランス人学生を受け入れています。邊教授のグリーンコンポジットの論文が8年前に欧文論文集（ACM）に掲載され、RENSEI 大学（フランス）の教授が論文に大変興味を持ち、研修生の受け入れを打診してきたことがきっかけでした。以来、毎年1人ずつ受け

入れ、今年の Nicolas Le Boulicaut 君で7人目となります（昨年度は震災の影響でフランス人学生の日本への渡航が禁止され中止）。

3か月の研修期間、研修生は集中して研修を行いますので、研究室の学生も刺激を受けて真剣に研究に取り組み、また研修生との会話は英語だけのため英語のコミュニケーション能力が格段に向上し、国際的なセンスを養うのに大きく貢献しています。



フランス人インターンシップ研修生を囲んで

土木工学科

土木工学科ではキャリアデザイン教育などを支援するため、平成23年度に「土木工学科学生キャリア支援人材センター」を設立しました。

センターは、本学科の教育方針のもと、学生の勉学や就職そしてキャリア教育などを指導する本学科専任教員に対する支援活動を行っていただける学外識者（本学卒業生を対象としています）の募集と、その支援活動の推進を目的としています。

支援センターはこの目的を達成するため、以下のことを行っています。

- ①支援員（本学卒業生）の募集
- ②本学科専任教員への支援員の紹介と運用補助
- ③支援員と本学科専任教員との意見交換会および学習会の開催

今までに実施した内容を以下に挙げ

「土木工学科学生キャリア支援人材センター」について

ます。

①実社会での具体的な仕事内容に関する講演（1年次のフレッシュマンセミナー、2年次のキャリアデザインの特別講演）

②安全教育・倫理教育（3年次の生産実習における事前教育）

③公務員・民間企業での採用試験の面接対策講座（4年次の就職支援対策）

講演は学生のみならず、教員のキャリア教育に対する意識の向上と、社会が求める学生像の理解にも役立ち、土木工学科のFDの一環としても位置づけることができます。

支援センターにおける人材の確保は、各研究室の卒業生および校友会からの



情報により行われています。支援員は、講演会などを実施する度に増えており、卒業生と在学生・教員との密接なつながりが生まれ、生産実習・就職に関する情報収集、ならびに卒業生の活躍状況を知ることができます。今後もこのセンターを有効に利用することで、社会と大学との結びつきがより一層強固になっていくことが期待されます。

建築工学科

平成23年度卒業設計審査会において「桜建賞」を受賞した本橋亜美と進藤麻里が、平成24年3月16日に千葉市 Qiball（千葉市中央区中央4-5-1）のアトリウム広場で行われた「第24回千葉県建築学生賞」に出品し、公開審査にてプレゼンテーションをしました。

これは、千葉の建築学科のある千葉大学・千葉工業大学・東京電機大学・東京理科大学・日本大学などの卒業制作を、日本建築学会千葉支所や千葉県建築家協会、千葉県建築士会の審査員が公開審査を行う卒業設計コンクールです。審査員や会場からの厳しい質疑にも一生懸命答える学生のやりとりの後、各賞が発表され、本橋亜美が千葉県建築学生賞特別賞を受賞しました。最優秀賞（1点）、優秀賞（2点）は惜しくも逃しましたが、それに次ぐ賞です。

卒業設計で桜建賞受賞者が千葉県建築学生賞特別賞を受賞

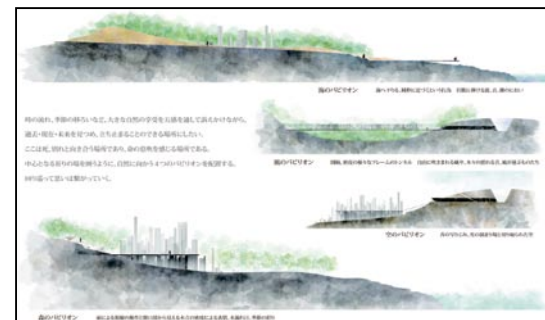


本橋亜美の卒業制作『繫一人を心を記憶』は、昨年3.11の東北大震災をテーマにした意欲作です。震災をテーマにすることはさまざまな考えと微妙な問題がからむためデリケートさが求められますが、日本の建築学科で学ぶ学生としてはぜひ取り組むべき問題だと思います。その難しいテーマに果敢に挑んだ、その意識の高さを評価したい。

設計趣旨は、震災によって

家や街、人の関係、未来や過去との時間もバラバラになってしまったものをもう一度繋いでいこうというもの。

陸前高田市の岬に森・風・空・海のパビリオンをつくり、聴覚・視覚・触覚・嗅覚に集中する環境を作ること、解体されてしまったものに想いを馳せ、それらをめぐりながら関係が生まれ繋がることを意図した、ランドスケープとも言える空間の設計でした。



応用分子化学科

平成24年4月21日と22日の1泊2日で、新入生オリエンテーションが行われました。

第1日目には、日本の代表的な避暑地である軽井沢の歴史や文化に触れる目的で行った軽井沢散策。宿泊先である日本大学軽井沢研所ではグループミーティングを行いました。大学生活に関する疑問や不安などの内容について教員がアドバイスをしたり、グループごとの話し合いが行われました。

第2日目は、簡単な陶芸体験（手びねり）をしてもらいました。参加者自らの感性で造形し、“ものづくり”の楽しさを体験してもらいました。

平成24年は日本大学生産工学部創設60周年の節目の年となります。60周年記念事業の一環として、2010年にノーベル化学賞を受賞された根岸英一先生

卒業生、在学生、大学（学部、学科）が有機的に連携し、相互発展の関係を目指して

をお招きし、「遷移金属触媒が21世紀を救う」と題して特別講演会が平成24年5月23日（水）に開催されました。本学部の学生を中心に1,000人を超える参加者が根岸先生の熱のこもった講演を傾聴しました。（関連記事22頁）

この節目の年に応用分子化学科が取り組まなければならないことのひとつとして、卒業生、在学生、そして学科（大学）の結びつきを強め、相互に扶助し合い、共に利益を享受し合える関係を築くことがあります。8,000人を超える当学科の多くの卒業生、在学生、大学（学部、学科）が有機的に連携し、お互いが扶助し合うことで、相互の発展が期待できます。



ものづくり体験（手びねりの様子）

応用分子化学科では生産工学部校友会（卒業生の親睦団体）と連携し、当学科の全卒業生を対象とした同窓会を平成24年11月24日（土）、生産工学部津田沼キャンパスにて開催する予定です。同窓会当日、在校生と卒業生との交流会、卒業生による講演会、卒業年度・研究室別での情報交換会が行われます。

マネジメント工学科

マネジメント工学科は、平成 18 年度より学科名称を管理工学科からマネジメント工学科と改称しました。

そして、平成 25 年度からコース名称を変えた「ビジネスマネジメントコース」、「経営システムコース」のほか、新たに第 3 の柱として「フードマネジメントコース」が加わります。

このように、3 コース体制で工学の基礎知識や方法論をベースにしたマネジメントに関する知識と手法を学びます。

ここで改めて、各コースを紹介させていただきますと以下の通りです。

- ◎ビジネスマネジメントコース
- ◎経営システムコース
- ◎フードマネジメントコース

平成 25 年度から 3 コース体制で専門家育成を目指します

ビジネスマネジメントコース

経営資源と言われるヒト、モノ、カネと情報、さらに知的財産に関する考え方や理論・技法を学習、それらの資源の選択と集中を図るための戦略を考え、日々変化するビジネスの状況において、直面するさまざまな問題をマネジメントできる専門的スタッフあるいは企業経営者を育成します。

経営システムコース

科学技術や工学、情報通信技術の知識を生かして、組織が直面するさまざまなマネジメントの問題解決に取り組むための方法論を実践的に学習。製品やサービスの企画、システムの開発・設計および運用の各段階において、創造力を発揮して効果的にマネジメントできるエンジニアを育成します。

フードマネジメントコース

フードビジネスを視野に、顧客が求める商品を開発し、消費者へ提供していくシステムのなかで必要となる企業マネジメントの理論、手法など、その考え方を通して問題解決を見出していく方法論を習得することを目的とし、実践教育によってグローバルな視点からの経営スタッフとして必要となる企画力、問題解決能力、マネジメント能力を有する人材を育成します。



数理情報工学科

オークランド工科大学の知識工学・知識獲得研究所 KEDRI のカルチャについて

松田 聖 教授

ニュージーランドのオークランド工科大学の知識工学・知識獲得研究所 KEDRI に 2010 年 12 月から 3 ヶ月近く海外派遣研究員として滞在し、所長の Kasabov 教授らとの共同研究に取り組みました。Kasabov 教授は国際脳神経回路網学会の会長を務める当該分野におけるビッグネームの 1 人です。本稿では、優れた研究を生み続けている KEDRI の研究カルチャーについてお話ししたいと思います。

当初考えていた研究テーマは、双方の共通の研究対象と思われる進化した神経回路網の最適化機能による知能のモデル化でした。ところが、行ってみると、KEDRI は生体の神経細胞により近いスパイキングニューロンの研究が中心となっていました。例えば、研究資金提供元の意向によっても、研究テーマが

かなり左右されることは珍しくないようです。

<SCRAP & BUILD>

つぎは研究の担い手が多数の任期制研究員ということです。研究に 100% 専念でき、また成果を上げることで、任期延長を果たしたり、より条件のよい機関へ転出することを考えているため、研究に取り組む姿勢には並々ならぬものが感じられました。

<COMPETITIVE PRINCIPLE>

3 番目は常に海外に目が向いていることです。論文は国際的に評価の高い会議・論文誌に発表し、国際的な評価を得ることによって世界中から研究資金と有能な研究者を集め、再び優秀な研究を行うという正のスパイラルを廻すことを常に念頭において、研究所の運営が行われているように感じました。



KEDRI にて Kasabov 教授 (KEDRI 所長) と <GLOBALISM & POSITIVE FEEDBACK>

最後に、肝心の共同研究に関しては、帰国直前にスパイキングニューロンの学習に関するアイデアが浮かび、帰国後にメールや skype でやり取りをしながら研究を続け、国際的にトップレベルの論文誌に 2 本の論文が採録されました。共同研究は、研究内容を高め、研究速度を加速する非常に優れた環境であることを改めて認識しました。

環境安全工学科

4 月 21、22 日の 2 日間、毎年恒例の新入生オリエンテーションで鬼怒川温泉と「ツインリンクもてぎ」に行ってきました。

当日は天候にも恵まれ、生産工学部を出発したバスは一路、鬼怒川温泉の「ホテル御苑」をめざしました。途中のサービスエリアでは、学生たちが楽しそうに写真を撮ったり、軽食をとったりする光景が見られました。

ホテルに到着し、長旅の疲れを癒そうと学生と連れだって大浴場へ。湯船で鬼怒川を眺めながら会話を弾ませていたところ、野生のサルを目撃。みな初めての体験に大興奮でした。

夕食後のグループミーティングは教員 1 名と学生約 10 名のグループで、大学生活や 4 年間の目標、将来について話し合いました。思い思いに将来の夢、過去の失敗談、受験のこと、抱え

教員と学生間の連帯を生む新入生オリエンテーション

ている不安などを話すことにより、お互いを理解し合う良いきっかけとなりました。



翌日は「ツインリンクもてぎ」で、人間型二足歩行ロボット ASIMO のデモンストレーションを見学。みな日本のロボット技術に驚嘆していました。また、まだ公表前でしたが、特別に ASIMO の姿勢制御技術から生まれたモビリティ U3-X のデモンストレー

ションもを見せてもらい、すこし得した気分になりました。昼食後は観光バスでインディカーレースが行われるオーバルコースを走行しました。

サーキットのバンクは、車内からはそれほど違和感を感じませんでしたが、降りてみると非常に急な勾配に驚きました。

たくさんの思い出ができた行事になり、1 年生のフレッシュマンセミナーの講義でも教員と学生間の連帯を感じることができています。



創生デザイン学科

記憶をたどり騎兵旅団司令部を模型 (S=1/50) で再現 一市民プラザ大久保に展示一

川岸研究室のメンバーが制作

「騎兵のまち」として知られる大久保にあってあった習志野騎兵旅団司令部の復元模型を制作した。

同司令部は明治 33 年に竣工し、戦後は郵便局・電報電話局として利用されていたが、昭和 30 年代に取り壊された。(その後、習志野郵便局が建設され運営されていたが、移転に伴い平成 22 年に解体された。)

平成 24 年、同所に市民プラザ大久保が開設されることになり、「温故知新のために」模型制作の話が持ち上がった。

地元有志『秋山好古と習志野』刊



行会のメンバーの企画、依頼を受けて、川岸研究室 (川岸梅和 教授、杉本弘文 元研究員、青木啓也、糸島瑛莉香、及川友介、大島惇平、塩澤美和、吉崎祐紀子 (4 年)) で模型制作に取り組んだ。完成した模型は、3 月 25 日にオープンした市民プラザ大久保に展示されている。(なお、川岸梅和教授は、市民プラザ大久保の指定管理者である一般社団法人あったか大



久保ひろばの理事を務めている。)

5 月 13 日 (日) には、習志野騎兵史跡保存会・『秋山好古と習志野』刊行会・大久保商店街協同組合主催による「地域に根ざした物語サミット」松山市、新潟市、習志野市のスペシャリストが語る「秋山好古大将」騎兵の生涯」が 37 号館 101 講堂で開催されるとともに、松井勇学部長があいさつされ、会場に模型も展示された。

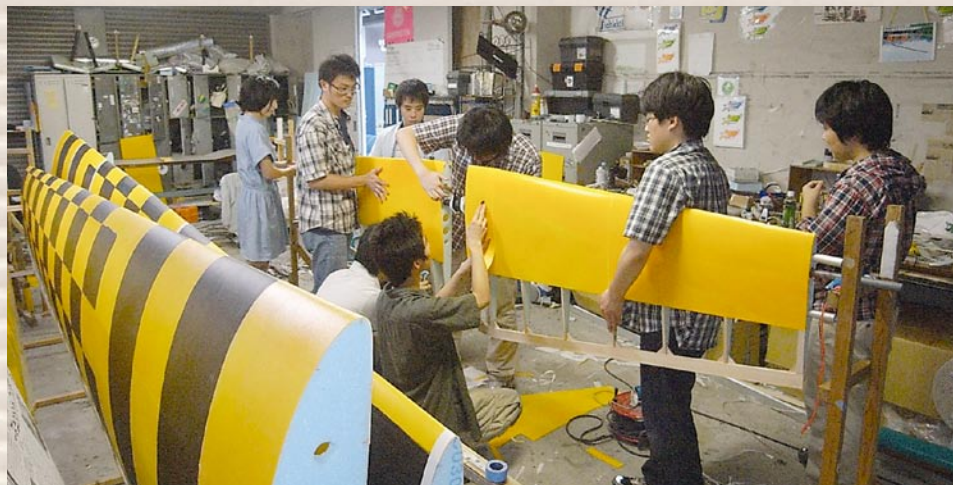
『第35回 鳥人間コンテスト選手権大会』

津田沼航空研究会が滑空機部門に出場

開催日：7月28日(土)・29日(日)
開催場所：琵琶湖松原水泳場
大会主催：読売テレビ
<http://www.ytv.co.jp/birdman/>



「Iris(アイリス)の機体マーク」



書類審査を通過し、第35回鳥人間コンテスト選手権大会への出場が決定しました！
今年の機体名は「Iris(アイリス)」です。花の名前で、黄色いアイリスは日本語で「黄菖蒲」と呼ばれています。花言葉は「リベンジ」や「幸せをつかむ」です。昨年は、滑空直前に降った雨で足が滑って不運にも失格となってしまい、第3位の記録が幻となってしまいました。今年こそは、琵琶湖で300m越えの滑空を達成し、入賞を目指します。ぜひ、応援をお願いいたします。

第5回 風力発電コンペ WINCOM 2012 開催

生産工学部は本年度も「ものづくりの楽しさ」と「環境に優しい風車発電機の性能」を自転車発電機で競う「第5回風力発電コンペ WINCOM2012」を11月に開催します。
優秀賞やアイデア、デザイン賞などを用意しています。
応募は「高校生グループまたは個人」とオープン参加の「大学生や社会人のグループまたは個人」で、出身高校の後輩へ参加を勧めて頂いたり、在校生諸君らの参加も強く希望しています。

開催日：平成24年11月4日(日)

会場：生産工学部津田沼校舎

エントリー期間：平成24年7月13日～9月20日

参加50チームを募集中!!

応募要項は <http://www.cit.nihon-u.ac.jp/wincom/> に掲載中ですのでご覧ください。

第5回風力発電コンペ実行委員会

主催：日本大学生産工学部

後援：日本大学生産工学部校友会、千葉県教育委員会、
日本風力エネルギー学会、日本機械学会関東支部千葉県ブロック、
千葉県環境評議会

開催日：平成24年11月4日(日)、搬入日11月3日(土)

会場：日本大学生産工学部 津田沼校舎



自然エネルギーに関心ある学生や近隣の皆さんの参加とコンペ会場で応援を歓迎します

■問合せ先：

日本大学生産工学部第5回風力発電コンペ2012事務局
TEL/FAX 047-474-2461

Eメール：cit.wincom@nihon-u.ac.jp

TOPICS

74歳で入学、長年抱き続けた夢の博士号取得に挑戦

今年4月、日本大学大学院生産工学研究科の博士後期課程機械工学専攻に、74歳の長見茂氏が入学しました。

氏は、CADシステムなどを販売する会社ファソテックの経営を現社長(嶋田周吉)に譲って、長年抱き続けてきた博士号へのあこがれを実現するための一歩を踏み出したのです。

入学のきっかけとなったのは、5年前、後継者選びを模索し始めていた際、千葉産業人クラブで邊吾一教授と出会い、邊教授から「本気で取得を考えるなら協力する」との言葉をもらい、博士号取得の決意をしたといいます。

長見氏の研究テーマは、「先端複合材料におけるRTM数値シミュレーションの確立と実験による評価」で順調に行けば博士後期課程3年間で取得となります。

70歳以上の人が入学するのは邊研究室はもとより、生産工学部でも初めて。研究室は若い研究生と共用だが、共用について邊教授は「長見氏と相互で刺激を与え合って」研究室は活性化しているという。



3年後長見氏は喜寿を迎え、3年半後邊教授は定年を迎えます。長見氏は「人生最後の大仕事」といい、邊教授は「教授生活最後の大仕事」と、共に大きな仕事の取り組みに意欲を燃やしています。

平成23年度学位取得者一覧

次の方々が平成23年度に博士の学位を取得されました。
今後のご活躍を期待しております。

課程修了によるもの					
専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
機械工学専攻	博士(工学)	中村幸一	現場重合型ポリアミド6をマトリックスとするFRTPの成形法と機械的特性評価に関する研究	日本大学	平成24年3月25日
土木工学専攻	博士(工学)	大松澤季宏	クリーンエネルギーを用いた電解浄化システムによる閉鎖性水域の浄化に関する研究	日本大学	平成24年3月25日
建築工学専攻	博士(工学)	宮原俊介	建築解体プロセスにおける建設副産物の排出と静脈物流の決定要因に関する研究	日本大学	平成24年3月25日
応用分子化学専攻	博士(工学)	小林淳平	効率的な水素生産を目的とした光合成細菌の代謝経路に関する研究	日本大学	平成24年3月25日
応用分子化学専攻	博士(工学)	石塚芽具美	エネルギー伝達デバイスの開発を目的とした自己組織化単分子膜の形成に関する研究	日本大学	平成24年3月25日

論文提出によるもの					
専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
土木工学専攻	博士(工学)	川上篤史	道路舗装工事におけるライフサイクルCO ₂ 評価に関する研究	日本大学	平成23年11月28日
土木工学専攻	博士(工学)	塩坂邦雄	リモートセンシングを活用した地すべり調査に関する研究	日本大学	平成24年3月12日

「生産工学部創設60周年記念事業募金」寄付者ご芳名

創設60周年記念事業募金にご賛同頂き心から感謝申し上げます。

平成23年6月から平成24年5月までにご寄付を頂戴した皆様のご芳名を記載させていただきました。

なお、学部広報誌等へのご芳名の掲載を希望されていない方は、記載されておりません。

在学生父母

池田 浩一	伊藤 邦昭	今井 章人	岩井 浩通	大澤 一美
太田 豊	大椋 正男	岡田 和幸	小倉 守郎	長田 健雄
小澤 守	小田 忠将	霞 春男	桂 晃洋	唐澤 秀樹
川田 英二	河野 道秀	木村 勲	藏持 雅一	小出 一人
國分 生子	小坂 幸司	兒玉 元二	小林 和雄	小林 春敬
小峰 重男	酒井 征二	佐倉 匡	佐々木 満	佐藤 勝弘
篠田 枝里子	清水 正明	曾我 俊一郎	田邊 洋一	茶木 俊明
飛内 弘規	富岡 政明	鳥部 一誠	中西 修二	中野 英
中村 清喜	中山 常明	仁藤 慎一	橋本 寿夫	橋本 光夫
畠山 圭一郎	彦部 和夫	比留川 吉郎	福島 真理子	藤川 恭一
堀込 欣光	本多 諭	松崎 清司	宮川 武	宮崎 久仁彦
山崎 徹也	山村 政明	山本 成男	横山 訓彦	吉松 朋子
渡邊 光				

校 友

藍 慎太郎	愛澤 忠良	相澤 善彦	秋元 康夫	安居院 克巳
阿久津 忠俊	浅井 透	浅倉 勉	朝日 洋	浅見 明
安藤 憲生	井形 眞寿夫	井口 潤一	池崎 正典	池田 紀三男
池田 文子	池田 佳正	石井 明	石川 智之	石橋 聡
伊藤 俊郎	猪山 一郎	岩澤 庸介	上田 憲治	上田 浩司
上野 宗寿	江隈 一夫	江刺 芳行	江澤 洋	江藤 進
大石 恭史	大木 高公	大久保 良輝	大沢 吉範	大鹿 晏弘
太田 伸之	大西 明彦	大西 敏	大橋 節典	大平 貴之
尾形 賢一	小勝 博務	岡野 透	小川 耕平	小川 達也
小倉 知晃	小田島 正幸	鬼丸 三也	尾上 昇	小原 智
柿内 孝幸	風間 克己	加藤 仁	金子 尚人	金田 克治
鎌田 芳郎	上谷田 浩幸	川上 賢一	川野 岳夫	河原 和人
岸田 孝弥	木田 敏夫	北村 彰浩	木村 靖彦	國東 保志
久保田 努	倉田 俊彦	藏持 雅人	黒田 正治	黒山 英伸
桑島 隆夫	鯉淵 匡充	小嶋 智文	小林 辰幸	小林 秀夫
小松崎 朋征	近藤 弾	今野 芳弘	斉藤 光雄	逆井 彰
坂本 健太	坂本 裕美	桜井 雅聖	桜井 康貴	笹井 公一
佐々木 隆	佐々木 融	佐藤 伸一	佐藤 時也	佐鳥 静夫
澤 桂司	静野 翠	渋谷 清	島田 保彦	清水 高慶
清水 利徳	白川 禮治	末永 宰	須貝 均	杉浦 宇
須崎 政一	鈴木 偉人	鈴木 祐司	須藤 定治	砂田 武士
洲浜 繁達	諏訪 矩章	高木 隆光	高橋 貴之	高橋 直樹
高橋 秀基	高村 和秀	武内 清彦	武内 伸吉	武内 寿憲
武田 裕治	田崎 容市	田中 定雄	田中 健	田中 正之
田巻 和秀	千代田 英次	塚本 晃一	津田 真吾	津留崎 勝己
手塚 知行	寺久保 寛	戸田 康之	直江 和雄	中川 豊

校 友

中島 匡人	中野 将智	仲間 大	中村 力	中村 登
新倉 弘幸	新館 和豊	西川 進	西室 綾乃	西山 完治
西山 重基	二宮 隆治	野上 杰	橋本 佳幸	長谷 裕子
長谷川 陳宗	濱名 雅一	林 茂男	林 大八郎	原 高明
日暮 保巳	平澤 資祥	平野 正晴	藤井 雅人	藤曲 弘幸
藤原 克彦	古橋 秀夫	星野 和彦	星野 博昭	前田 邦弘
松井 博幸	松井 悠樹	松崎 清司	松田 俊二	松久 茂
松本 信秀	三浦 純朗	三上 誠	三代 剛久	皆川 康浩
南 昌宏	南 雄介	三宅 修平	三宅 昌治	宮澤 典義
三好 康夫	三輪 司	武藤 岳人	武藤 義徳	村上 真琴
村上 正憲	村田 直昭	室木 正春	森井 達之	守田 隆司
八尾 泰弘	矢島 隆	谷津 弘	山口 典男	山崎 悦次
山崎 順一	山崎 恒樹	山田 正道	山辺 克好	吉田 孝一
吉田 泰和	米澤 博之	涌井 清次		

教職員（退職者を含む）

阿部 治	阿部 忠	有賀 聡	安藤 努	和泉 剛
伊藤 義也	今村 宰	遠藤 茂勝	大木 宜章	大澤 慶吉
岡田 昌樹	景山 一郎	兼房 慎二	河合 紘茲	川村 政史
菊地 俊紀	栗谷川 幸代	越川 茂雄	小森谷 友絵	今 斎
酒井 哲也	澤野 利章	高橋 克幸	高橋 清造	高橋 大輔
竹島 正博	田中 智	田中 祐司	栃窪 孝也	長岡 愛
長堀 百合江	新妻 清純	西澤 一友	野澤 達也	野村 浩司
萩野 健司	日秋 俊彦	藤井 孝宜	邊 吾一	松井 聡
松原 三人	丸茂 喜高	見坐地 一人	南澤 宏明	峯 恭一
柳内 睦人	矢野 耕也	山内 基海	山形 治江	山下 安雄
若林 敬造				

企業・団体

(株)アゼガミ	(株)イトーキ	(株)入江三宅設計事務所	浦井工業(株)
(株)エイチアンドエス	大久保商店街協同組合	大森機械工業(株)	(株)小川防災
オーシャンフォトンクス(株)	鹿島建設(株)	(株)梶建築設計事務所	(株)環境技研
(株)木村鑄造所	共和メンテナンス(株)	キヨス薬品(株)	クリエート商事(有)
京葉ケミー(株)	(株)広正社	(株)小関田中園	寿町会
(有)コバヤシスポーツ	(株)澤工務店	(株)三陽理化学器械製作所	三光工業(株)
三友エンジニアリング(株)	三洋試験機工業(株)	(株)新広告社	(有)スルガヤ
(株)総建	(株)蒼設備設計	耐圧硝子工業(株)	大成温調(株)
(株)高橋電気工事	(株)拓匠開発	ティ・オーオー(株)	東亜サービス(株)
東京通信電設(株)	飛島建設(株)	(株)七尾商会	(有)習志野巖翠堂書店
日本興産(株)	日本サン石油(株)	日本ビルコン(株)	日本リーテック(株)
日本レコードマネジメント(株)	(株)長谷川鐵工所	(株)ビーエムビー	(株)ビルテック
日比谷総合設備(株)	不二公業(株)	(有)ホーコーフーズ	瑞穂電機製作所
三井住友建設(株)	(株)モンタージュ	ヤマト無線(株)	(有)大和屋書店
理想科学工業(株)			

(敬称略、五十音順)



新任教員 紹介

機械工学科

本年4月より機械工学科に着任しました。

専門は、複合材料工学という分野で「鉄より強く、アルミより軽い」というキャッチコピーで航空宇宙構造材料として発展したCFRPなどが挙げられます。現在も軽量化の必要な輸送機器や、特殊な性能が要求される分野での構造材料・機能材料として日々、研究・開発が続けられています。私も社会に貢献できるような研究成果を目標としつつ、ともに学ぶ学生の皆さんには、夢と高い理想を持ったエンジニアになってもらいたいと思っています。



助教
平林 明子
ひらばやし あきこ

建築工学科

本年4月に着任するまでの9年間、ゼネコンの研究所で建築物の地盤基礎に関わる研究開発および設計・現場の支援を行っておりました。

液状化、地盤調査、山留めを主な研究テーマとしており、東日本大震災が起こった昨年に「エネルギーの釣合いに基づく地盤の液状化に伴う沈下予測に関する研究」と題した論文で学位を頂きました。大規模な液状化被害をはじめとした種々の地盤災害を目の当たりにし、研究者としての責務に加えてこの分野における技術力向上の必要性を改めて強く胸に抱きました。しかし、建築を専攻する学生が地盤基礎を学ぶ機会は少なく、建築業界ではこの分野の技術者が不足している状況にあります。本学ではゼネコンでの経験を生かしてこの分野の発展に資する研究開発を進めるとともに、学生に対しては理論だけではなく実務の状況も交えた教育を行って良い人材を送り出していきたいと考えております。



助教
下村 修一
しもむら しゅういち

環境安全工学科

平成23年3月に日本大学大学院理工学研究科より学位を取得し、新潟大学大学院自然科学研究科に産学官連携研究員として勤務したのち、平成24年4月より環境安全工学科に着任いたしました。専門は無機機能材料、私たちの暮らしに密着した材料の合成です。結晶構造学からどのような材料を合成し、どのように応用展開ができるか、新しい機能材料の設計と合成について研究を行っています。特に無機蛍光体の合成に関する研究を中心にしており、この無機蛍光体は現在話題のLEDの発光素子として使用されている材料です。発光色の制御や発光強度を高める研究をしています。

環境安全工学という学際的に新しい専門領域ですが、身を粉にして教育・研究活動に力を注いでいく所存です。また、専門の研究を通して社会に出て光輝けるような人材育成にも取り組んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。



助手
亀井 真之介
かめい しんのすけ

創生デザイン学科

東京藝術大学を修了し、沖縄県立芸術大学非常勤講師、東京藝大の助手、非常勤講師を経て、今年度4月より、創生デザイン学科の助教として着任しました。

専門は鍛金です。鉄を赤く熱し、叩き、立体の作品を制作しています。個展も開きますので機会があれば覗きにきてください。

ゼミや授業では、手を動かし、実物を生み出す課題を中心に指導していきます。頭で描いたデザインを現実の物にしてゆくプロセスや、そこに生まれる情熱や感動を伝えられるよう、自身も高い理想を持ち、教育や研究活動に励んでいきます。



助教
木下 哲人
きのした てつひと

教養・基礎科学系

佐藤友彦と申します。平成19年3月に大阪大学大学院で学位取得後、学習院大学計算機センター助教としての3年間、同大学理学部客員研究員としての2年間を経て本年度4月に教養・基礎科学系に着任いたしました。

私の専門は偏微分方程式論で、特に指数型や平均場理論などに代表される非線形楕円型方程式の解の性質（漸近的非退化性・一意性など）や、通常のユークリッド空間ではない“曲がった”空間における偏微分方程式について研究しています。

授業は、コンピューター基礎演習、微分積分学、線形代数学などを担当します。どの学科で学ぶとしても、基礎の一部分である数学と情報リテラシーを修得し、学生の皆さんがそれぞれの専門分野で活用できるように、私自身も研鑽を積み、教育・研究活動に取り組みたいです。

大変簡単ではございますが、このような自己紹介の機会を頂きました事に感謝申し上げます。どうかよろしくお願いいたします。



助教
佐藤 友彦
さとう ともひこ

教養・基礎科学系

本年度より教養・基礎科学系に助教として着任しました。専門は運動生理学で、ヒトの運動制御に関連した脳内機序について研究しています。現在は、多チャンネル脳波計測を行い、そこから求められる大脳皮質の事象関連脱同期／同期活動を指標として、運動の意思決定後における反応キャンセルに伴う運動発現抑制時の脳内制御機構の解明について取り組んでいます。

授業はスポーツの実技科目（硬式テニス、ソフトボール、軟式野球、サッカー、トレーニング）を担当しています。適度な運動は健康の維持・増進のためにも、脳機能の維持・向上のためにも重要です。授業を通して、適切な運動法および継続的な運動習慣を身につけてもらい、さらに運動の有益性を理解してもらうことで、生涯スポーツへの導入となることを目指して教育していきたいと思っています。



助教
高寄 正樹
たかよせ まさき

教養・基礎科学系

上智大学一般外国語教育センター、新潟の敬和学園大学人文学部英語文化コミュニケーション学科での勤務を経て、平成24年4月に教養・基礎科学系に赴任いたしました。

専門はアメリカ文学・文化で、特に20世紀のアメリカ南部の小説を中心に、アメリカ社会における人種とジェンダーの問題について研究を続けてきました。

授業では、グローバル社会で活躍するエンジニアとして必要な国際感覚、英語力の養成に取り組んでいきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



助教
平塚 博子
ひらつか ひろこ

教養・基礎科学系

本年4月よりご縁あって教養・基礎科学系の助教として着任いたしました。平成22年9月から平成24年3月まで教養・基礎科学系および応用分子化学科の非常勤講師として勤務しておりました。専門は化学工学・分離工学で、直径が数百ナノ～数十マイクロメートルの微細な気泡の気体と液体の境界面を新しい化学反応場として用い、海水中の有価資源の回収や液中の難分解性物質の分解、医薬品結晶の構造制御に関する研究を行っております。

授業は「化学I」「化学II」「基礎化学演習」「化学・生物実験」を担当しております。日々の授業・実験での学生の姿から指導のあり方、生き方を学び、共に夢を求めて、共に育ちたいと考えております。そして、在学中の学生達が学びの充実感を得ることができ、卒業後には生産工学部で学んだことを誇りに思えるよう教育・研究に真摯に臨んで参りたいと思います。よろしくお願いいたします。



助教
松本 真和
まつもと まさかず

新任教員のみなさん
よろしくお願いいたします！



創設 60 周年記念行事

生産工学部創設 60 周年を記念して、ノーベル化学賞受賞者、根岸英一・米パデュー大学特別教授の講演会が開催されました。

平成 24 年 5 月 23 日（水）生産工学部において、2010 年にノーベル化学賞を受賞されたパデュー大学特別教授 根岸英一先生の講演が行なわれました。講演のテーマは「遷移金属触媒が 21 世紀を救う」で、本学学生、教員など 1,000 名以上が聴講しました。

講演では、ノーベル化学賞につながった、いわゆる「根岸カップリング」の発見までの、研究の試行錯誤と長い道のりをユーモアを交えながら語られました。



「根岸カップリング」＝工業製品の多くは、炭素原子が骨格となる有機化合物が多い。しかし炭素原子同士は結合しにくい性質がある。根岸氏はパラジウムまたはニッケルを触媒として使い、炭素同士を結合させる反応を 1977 年に報告。これが「根岸カップリング」と命名され、その後有機合成化学分野が「日本のお家芸」として発展するきっかけのひとつになった。

■今後予定されている記念行事

- 平成 24 年 10 月
創設 60 周年記念誌の発行
- 平成 24 年 10 月 20 日（土）
創設 60 周年記念式典・祝賀会
- 平成 24 年 11 月 9 日（金）
生産工学部創設 60 周年記念「生産実習・就職合同企業懇談会」および「生産実習パネル・ディスカッション」（予定）
生産工学部創設 60 周年を契機として、生産実習の拡充・発展および就職企業の一層の開拓を目指す。併せて「生産実習の成果に関するパネル・ディスカッション」を開催し、その成果を浸透せしめ、もって厳しい就職状況の改善と就職率の向上を図るため、企業担当者と教職員の懇談会を開催する。
①生産実習成果合同報告会
②パネル・ディスカッション
テーマ：生産実習に対する期待と評価―企業、学生、大学の視点から―
- 平成 24 年 12 月 1 日（土）
創設 60 周年記念 生産工学部学術講演会

平成 24 年度行事（後期）

行 事	2～4 年次：津田沼校舎	1 年次：実籾校舎	大学院	備 考
後 期 ガ イ ダ ン ス	9 月 19 日（水）※応用分子化学科 1・2・3 年のみ 9/18（火）・9/19（水）			9 月 19 日（水）
後 期 授 業 開 始	9 月 20 日（木）			
A O 入 学 試 験	9 月 15 日（土）・16 日（日）			
卒 業 式・学 位 授 与 式（9 月）	9 月 27 日（木）		9 月 27 日（木）	
父 母 懇 談 会	9 月 29 日（土）津田沼校舎			
創 立 記 念 日	10 月 4 日（木）			休校
編 入 学 試 験（2 年 次・3 年 次）	10 月 13 日（土）			
外 国 人 留 学 生 入 学 試 験	10 月 13 日（土）			10 月 13 日（土）
帰 国 生 入 学 試 験	10 月 13 日（土）			
校 友 子 女 入 学 試 験	10 月 13 日（土）			
学 部 創 設 60 周 年 記 念 式 典	10 月 20 日（土）			
父 母 懇 談 会	10 月 27 日（土）地方別実施			
学 部 祭（桜 泉 祭）	11 月 3 日（土・祝）・4 日（日）			（11 月 2 日準備日） 11 月 5 日片付日）
入 試 説 明 会・オ ー プ ン ラ ボ	11 月 3 日（土・祝）			
指 定 校 制 推 薦 入 学 試 験	11 月 17 日（土）			
提 携 校 推 薦 入 学 試 験	11 月 17 日（土）			
体 育 推 薦 入 学 試 験	11 月 24 日（土）			
ト ッ プ ア ス リ ー ト 推 薦 入 学 試 験	11 月 24 日（土）			
付 属 高 等 学 校 等 入 学 試 験（付 属 推 薦 B 方 式）	11 月 24 日（土）			
博 士 論 文 提 出 期 日			11 月 22 日（木）	
学 術 講 演 会	12 月 1 日（土）			
公 募 制 推 薦 入 学 試 験	12 月 8 日（土）			
付 属 高 等 学 校 等 入 学 試 験（付 属 推 薦 A 方 式）	12 月 15 日（土）			
冬 季 休 業	12 月 25 日（火）～1 月 10 日（木）			12 月 25 日（火）～1 月 10 日（木）
後 期 授 業 終 了	2 月 4 日（月）			学 部：12/22、1/12、 2/2 は 授 業 予 備 日
補 講	土曜日適宜実施			
大 学 入 試 セ ン タ ー 試 験（C 方 式）	1 月 19 日（土）・20 日（日）			
修 士 論 文 概 要（初 稿）提 出 期 日			1 月 24 日（木）	
入 学 試 験	A 1 方 式	2 月 1 日（金）		
	A 2 方 式	2 月 9 日（土）		
	A 3 方 式	2 月 19 日（火）		
修 士 論 文 提 出 期 日			2 月 25 日（月）	
大 学 院 入 学 試 験（第 2 期）			3 月 2 日（土）	
転 科 試 験（2 年 次）	3 月 4 日（月）			
卒 業 式・学 位 授 与 式	3 月 25 日（月）		3 月 25 日（月）	日 本 武 道 館

個人情報の取扱い告知文

日本大学生産工学部

入学手続き時及び在学中に収集する学生本人及び保証人の氏名、住所、生年月日及びその他の個人情報
は、学籍・成績管理、教育、学生生活支援、学費の案内、図書館利用、就職支援等及びこれらの業務に
付随する学生及び保証人への連絡・通知・掲示等、本大学の教育事業に必要な範囲で利用します。

また、これらの業務の一部を業者に委託する場合があります。この場合、当該業務の委託を受けた業
者は、上記利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を利用することはありません。

なお、本大学では、学生への教育・指導をより適切に行うため、保証人に対して学生の学業成績及び
出席状況等の開示並びに履修状況等についての相談を行う場合があります。

（問合せ先） 生産工学部教務課・学生課

韓国、台湾の3大学と学術交流の提携

慶尚大学校工科大学 (韓国)



全南大学校工科大学 (韓国)



提携日

- ◆2011年9月19日
全南大学校工科大学と提携
- ◆2011年9月20日
慶尚大学校工科大学と提携
- ◆2012年3月21日
中国科技大学の規劃與設計學院・
管理學院と提携

中国科技大学 (台湾)



中国科技大学
規劃與設計學院



中国科技大学管理學院

SPRING

日本大学生産工学部
2012年8月2日発行 **No.99**

■学部長メッセージ

生産工学部におけるものづくり教育

■特集 ものづくり教育

ものづくり拠点「未来工房」完成
学科のものづくり教育

■2011年度卒業生の就職結果について

■連載／卒業生インタビュー

(株)三田精工 代表取締役 三好 康夫さん

■学科ニュース

■CAMPUS NEWS

■トピックス



スプリング
SPRING No.99
(日本大学生産工学部だより)
平成24年8月2日発行
編集・発行 日本大学生産工学部 広報委員会

本誌に関する照会その他は下記をお願いします。
〒275-8575 千葉県習志野市泉町 1-2-1 日本大学生産工学部 庶務課
電話 047-474-2201 FAX 047-479-2432
E-mail: cit.info.shomu@nihon-u.ac.jp
www.cit.nihon-u.ac.jp

